

自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習

～「ひなたの学び」を通して～

I 主題設定の理由

Ⅰ はじめに

現代は急加速で情報化が進み、予測が困難な時代である。だからこそ、次世代を切り拓く子どもたちは、新たな価値を生み出し、持続可能な社会の創り手として、豊かにたくましく成長していくことが期待されている。

このような社会であるから、ひとりひとりが、感性を豊かに働かせながら、よりよい社会や未来をつくるにはどうすればよいかを自ら考え出すことが必要である。また、答えのない課題に対し、多様な他者と協働して目的に応じた納得解や最適解を見い出しながら合意形成を図っていくことも望まれる。このように、将来の主権者にふさわしい公民的資質の基礎を育てることを目指す社会科の役割はますます重要と考えられる。

本県小社研では、平成27年度より、研究主題を「自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習」、副題を「思考力・判断力・表現力を育む授業の構想」とし、問題解決的な学習を核とした単元構成及び授業構成に関する研究を進めてきた。

その結果、資料を根拠に自分の考えをまとめたり、発言したりすることができる子どもの姿が見られるようになってきた。しかし、対話を通して、社会的事象について比較・関連・総合して多角的に考えたり、新たな問いを自ら見い出したり、学んだことを生かして自分と社会とのつながりを考えたりするまでには至っていない。

そこで、子どもの主体的に学ぶ姿勢や自分と社会とのつながりを考える力を育成すべく、今年度より副題を『「ひなたの学び」を通して』と変更することとした。「ひなたの学び」とは、宮崎県教育委員会が推進している、子ども達の学びに向かう方向性を分かりやすく整理したものである。

「ひなたの学び」の「ひ」は、「ひとりひとりが問いをもち」、「な」は、「なかまとなって学び合い」、「た」は、「たかめよう深く考える力」となっている。

「ひなたの学び」を意識した手立てを講じることで、子どもひとりひとりが問題意識をもって、解決への見通しをもち、学びを調整しながら問題解決を図り、社会的事象を自分事として捉えたり、社会とのつながりを考えようとしたりすることができるようになると考えられる。また、協働的に学び合い、多角的な視点で社会的事象を捉え、その中で、自分の考えを見つめ直したり、新たな問いを見い出したりすることができると考えられる。さらに、子どもが学んだことを生かして選択・判断できる学習を意図的・計画的に単元構成の中に位置付ける。このような学習を積み重ねていくことで、社会を拓く子どもを育成できると考えられる。

以上のことから、研究主題を「自ら学び、考え、社会を拓こうとする子どもを育てる社会科学習」、副題を『「ひなたの学び」を通して』として、研究を進めていくこととした。

2 主題について

「自ら学び、考え、社会を拓こうとする子ども」とは

- 学習や生活の中で、社会に見られる課題をつかみ、知識と技能を活用して主体的に思考・判断したり、表現したりしながら課題を解決しようとする子ども
- 学習したことを生活に生かし、よりよい社会を考え続ける子ども

3 副題について

社会科における『ひなたの学び』とは

(1) ひ「ひとりひとりが問いをもつ」

- ・ ひとりひとりが社会的事象に関心をもち、「問い」をもつ。
- ・ 問題に対して根拠を明確にした自分なりの答え（予想、仮説など）をもつ。
- ・ 調べる事柄や調べ方などの解決に向けての見通しをもち、学習計画を立てる。 など

(2) な「なかまとなって学び合う」

- ・ 誰と学ぶのか、どのように学ぶのかなど、学び方を選択し、協働的に学ぶ。
- ・ なかまとの対話などを通して、多角的な視点で社会的事象を捉える。その中で自分の考えを見つめ直したり、新たな「問い」を見い出したりする。 など

(3) た「たかめよう深く考える力」

- ・ なかまとの協働的な学びを通して理解を深めたり、そこから生まれた新たな「問い」を追究したりする。
- ・ 学んだことを生かして、自分と社会とのつながりについて考えたり、自分ができるところを選択・判断したりする。 など

II 研究の内容

I 今年度の研究の重点項目

問題解決的な学習を進める上で、「問い」は重要である。これまでも本県小社研では、「問い」（「ひなた」の「ひ」）をどのようにもたせるべきかについて研究を進めてきた。今年度は、社会的事象について、比較・関連・総合して多角的に考えたり新たな「問い」を自ら見い出したりすることや、学んだことを生かして自分と社会とのつながりを考えたりする力の育成を図るために、協働的な学び（「ひなた」の「な」）を研究の重点項目と設定し、研究を進めることとした。

※協働的な学び

探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する学び

（文部科学省 HP より）

ひなたの学び（子どもの姿）	教師の手立ての例
ひとりひとりが 問いもち どうして？なぜ？と問いをもちます	○「問い」を生じさせる資料の提示 ○社会的事象を自分事として捉える工夫 ○ふりかえりを生かした学習問題の設定
なかまとなって 学び合い いろいろな人とつながり、学びあい、考えを広げます	○学び方を選択する場の設定 ○新たな資料の提示 ○なかまとの対話の場の設定 ○ふりかえりの場の設定
たかめよう 深く考える力 自らの問いに対して、深く学び、さらに伸びていきます	○学び方を選択する場の設定 ○学びを生かして選択・判断する活動の位置付け ○ふりかえりによる学びの確認

さらに、次年度からは、協働的な学びの中で生まれた新たな「問い」を追究したり、主体的に自分と社会とのつながりについて考えたりするなど、問い続ける子どもの育成を目指していきたい。

2 研究の視点

（１） 「ひなたの学び」を意識した単元デザイン

問題解決的な学習の過程において、指導者は、どのような知識を活用させるのか、どのような選択・判断の場面が設定できるのか等を明確にすることが必要である。そこで、「ひなたの学び」を意識しながら単元をデザインする。このような単元デザインにおける問題解決的な学習の流れは、以下の通りである。

○ 単元全体の流れ（例）

	学習内容
つかむ	資料と出会う ㊦
見通す	学習計画を立てる ㊦
調べる	資料やなかまとともに調べる ㊦ ㊮
まとめる	調べて分かったことや考えたことを文章や絵、年表などにまとめる ㊮ ㊴
ひろげる	学習したことをもとに自分と社会とのつながりなどを考える ㊦㊴ (選択・判断する、多角的に考える)

単元全体の中で、学習したことを生かして選択・判断したり、多角的に考えたりする学習内容について、学習指導要領には下記のように位置付けられている。

学年	内 容	内容の取扱い
3 年	(3)「地域の安全を守る働き」	選択・判断
	(4)「市の様子の移り変わり」	発展
4 年	(2)「人々の健康や生活環境を支える事業」	選択・判断
	(3)「自然災害から人々を守る活動」	選択・判断
	(4)「県内の伝統や文化」	選択・判断
5 年	(2)「我が国の農業や水産業における食料生産」	多角的・発展
	(3)「我が国の工業生産」	多角的・発展
	(4)「我が国の産業と情報との関わり」	多角的・発展
	(5)「我が国の国土の自然環境と国民生活との関連」	選択・判断
6 年	(1)「我が国の政治の働き」	多角的
	(3)「グローバル化する世界と日本の役割」	多角的 選択・判断

主に上記に挙げた学習内容で社会科における「ひなたの学び」の実現のため、実践を行っていく。今後、上記に挙げた学習内容だけでなく、様々な学習内容で多角的・発展な内容が実施できるかどうか、実践を集めていきたいと考える。

また、「ひなたの学び」は、単元を通してだけでなく、1 単位時間の授業の積み重ねが重要であると考えている。なお、1 単位の中ですべて㊦㊧㊨を網羅する必要はない。

○ 1 単位時間の流れ（例）

	学習内容
導入	前時の復習や資料から学習問題を考える ㊦
展開	資料やなかまとともに調べたり、考えたり、話し合ったりする ㊧ ㊨
まとめ	調べて分かったことや考えたことをまとめる ㊦ ㊧ ㊨

(2) 必然性のある協働的な学びを展開するための指導の工夫

- 話し合う必要性を感じるような「問い」の設定
 - ・ 子どものふりかえりを生かした導入
 - ・ 自分事として考えられるような「問い」の質の向上 など
- 資料の提示
 - ・ 子どもの思考のずれを生じさせる資料
 - ・ 実際の資料 など
- ふりかえり

(3) 協働的な学びを支えるための手立て

- 学びを支える力の育成
 - ・ 資料を読み取る力
 - ・ 納得解・最適解にたどり着くために話し合う力 など
- 深く考えたり新しい気づきが生まれたりするための指導の工夫
 - ・ 構造的な板書
 - ・ 思考ツールなどの活用
 - ・ ICT の活用
 - ・ ゲストティーチャーの活用 など

Ⅲ 研究の実際

第5学年「我が国の農業や水産業における食料生産（畜産業のさかんな宮崎県）」の実践

Ⅰ 「ひなたの学び」を意識した単元デザイン

(1) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 我が国の畜産業は、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、自然環境と深い関わりをもって営まれていることを理解している。 ② 畜産業に関わる人々は、生産性や品質を高めるよう努力したり、新鮮で安心・安全な食料を消費地に届けるため輸送方法や販売方法を工夫したりしていることを理解している。 ③ 地図帳や各種資料で調べ、まとめている。	① 生産量の変化や輸出力の変化、口蹄疫などに着目して、問いを見出し、生産者の工夫や努力について、考えたり、表現したりしている。 ② 学習したことを基に、畜産業の課題と自然条件に関連付けながら、これからの畜産業の在り方について考えたり、選択・判断したりして表現している。	① 畜産業の現状や課題について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして主体的に学習問題を追究・解決しようとしている。 ② 学習したことを基に、これからの宮崎県の畜産業を安心して続けていくための取り組みを考えようとしている。

(2) 単元指導計画

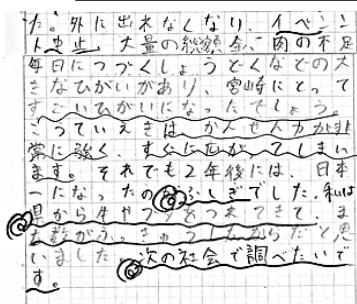
段階	学習活動	子どもの思考の流れ	評価
つかむ・見通す(2)	1 学習問題を設定し、学習計画を立てる。(2) ○ 肉牛の飼育頭数の内訳のグラフを見て、畜産業がさかんな理由を考える。 ○ アカデミー賞発表後のパーティで宮崎牛が使われている映像を見る。 ○ 生産量の推移を見て気づいたことを発表し合い、学習問題を設定し、学習計画を立てる。	畜産の全国の生産量の内訳 宮崎県 〈ブロイラー 1位〉〈豚肉 2位〉〈牛肉 3位〉 どうして宮崎県は畜産業がさかんなのだろう 〈広い土地〉〈自然環境〉〈人々の工夫や努力〉 アカデミー賞の映像 宮崎牛は世界にも認められているなんてすごい 宮崎牛の輸出量の推移(H18～H27) 平成22年に生産量が減っているけどそれから急激に増え続けているよ 平成22年の減少と宮崎牛が世界に認められたのに関係あるのかな 宮崎牛はどのようにして世界で認められるようになったのだろう。	知①③
調べる(5)	2 畜産業の人々の仕事の内容や工夫や努力を調べる。(3) ○ 繁殖農家の仕事について調べる。 ○ 肥育農家の仕事について調べる。 ○ 出荷方法や出荷先について調べる。	繁殖農家の人々はどういう工夫や努力をしているのだろう。【学①】 肥育農家の人々はどういう工夫や努力をしているのだろう。【学②】 どのようにして私たちのところに運ばれてくるのだろう。【学③】 ゲストティーチャー 教科書・資料集 宮崎牛の輸出量の推移(H18～H27) 平成22年に生産量が減っているのはなぜだろう【学④】 口蹄疫が原因 口蹄疫とはどのような病気なのだろう。【学⑤】 口蹄疫は、家畜伝染病のことなんだ 29万7807頭処分被害額2350億円 2012年の和牛の品評会から4回連続で1位になっている(新聞) 口蹄疫で多くの被害を受けたのに、2年後には4回も1位を取り続けているのはどうしてかな。【学⑥】 ミヤチクのパフレット 口蹄疫復興の資料と映像 多くの人の協力や努力、安心・安全な設備の徹底と宮崎牛ブランドを高めていくための取り組みを行っているからだ	態① 知②③ 思① 知②③
まとめる(1) ひろげる(2)	3 口蹄疫の被害からどのように復興したのかを調べる。(2) ○ 生産量の推移のグラフを見て、平成22年に減っている原因が口蹄疫ということを確認する。 ○ 映像や資料を基に、口蹄疫とはどのような病気を調べる。 ○ 口蹄疫で家畜29万7807頭が処分され、農家の人々はたくさんの被害を受けたという事実とそれでも2年後には品評会で高く評価されたという事実から、その理由を話し合う。	宮崎牛が世界に認められるようになったのは、口蹄疫を乗り越え、人々が様々な工夫や努力をし、宮崎牛のブランドを高めていく取り組みをしているから。	思①
	4 調べたことや話し合ったことを基に、学習のまとめをする。(1) ○ 今まで学習したことを、クラゲチャートにまとめ、宮崎牛が世界に認められた理由を考える。	宮崎県産牛の輸出量の推移(H28～R2年) 飼料の高騰 糞尿の始末 労働者の高齢化 これからの宮崎県の畜産業はずっと続けていけるのだろうか【学⑦】 続けていける 続けていけない 他県における持続可能な畜産業の取り組み 宮崎県がこれからもずっと畜産業を続けるためには、どのような取り組みをすればいいのだろうか。(本時)【学⑧】 宮崎県で求められている畜産業の在り方 宮崎県がこれからもずっと畜産業を続けていくためには、宮崎県の自然条件を生かしたえさづくりや循環型農業など宮崎県の資源を最大限活用することが大切。	思① 態② 思③
	5 学習したことを基に、これからの宮崎の畜産業について考える。(2) ○ 宮崎県産牛の輸出の移り変わり(H28～R2)と様々な課題(飼料の高騰や糞尿処理、労働者の高齢化)を基に、宮崎県の畜産業はこれからずっと続けていけるか、そうでないかを考える。 ○ 他県が行っている持続可能な畜産業の取り組みの資料を基に、宮崎県に合ったこれからの畜産業について考える。 【本時10/10】		

2 必然性のある協働的な学びを展開するための指導の工夫

○ 実践A：子どものふりかえりを生かした導入

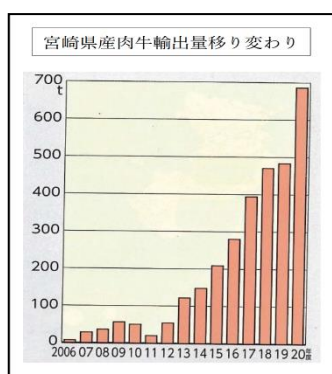
子どものふりかえり

子どものふりかえりを生かした授業



教師が単元指導計画を考えたときには、「口蹄疫で多くの被害を受けたのに、2年後には4回も1位を取り続けているのはどうしてかな。」という学習問題を設定していた。しかし、ある子どもがふりかえりに「2年後には、日本一になったのが不思議でした。」と書いていたため、学習問題で「2年後には日本一」という言葉を使った。子どもの思いを基に学習問題を設定したことで、問いを追究したいという思いが高まり、自然と仲間と話し合う姿が見られた。

○ 実践B：子どもの思考のずれを生じさせる資料



畜産業が抱える課題

- ・飼料の高騰
- ・糞尿の始末
- ・労働者の高齢化

宮崎県産肉牛輸出量の移り変わりのグラフを提示したことで、子どもたちは、これからの宮崎県の畜産業が安泰だという思いをもった。そのうえで、畜産業が抱える課題を提示した。そうすると、「本当に安泰なのか。」という疑問が生まれ、仲間と話し合いたいという思いをもつ姿が見られた。

3 協働的な学びを支えるための手立て

○ 実践C：ゲストティーチャーの活用



ゲストティーチャーとして、畜産農家の方と農協の方に来ていただき、働く人々の工夫や努力について話を聞いていただいた。話を聞くことで、子どもの中に新たな疑問が生まれた。その疑問を解決するために、主体的にゲストティーチャーと関わろうとする姿が見られた。

○ 単元を通した実践：ICTの活用／納得解・最適解にたどり着くために話し合う力の育成



単元を通して自分の考えを伝え合う機会を多く設定した。その際、伝える相手や方法を自由に選択させた。また、ICTを活用して考えを全体で共有させた。そのような活動を繰り返し行うことで、教師が介入せずとも、子ども同士で考えをつながりながら話し合う姿が見られるようになってきた。